

ダニエルズ歴史班 A

雲南南部環境史研究における史料についての一考察
野本 敬 (学習院大学人文科学研究科史学専攻博士後期課程)

キーワード：人口変動、開発、史料

調査期間・場所：中国雲南省大理白族自治州巍山彝族回族自治县（2003年8月25日～9月22日）
 中国雲南省思茅地区（2003年11月24日～12月22日）

A Note on Sources for the Study of the Environmental History of South Yunnan

NOMOTO Takashi (Gakushuin university Graduate School of Humanities Doctoral Course in History)

Keyword: Population Movement, Exploitation, Archives

Research Period and Site: 2003, August 25-September 22, in Weishan Yi and Hui nationality autonomous county, Dali Bai nationality autonomous district, Yunnan province, China, 2003, November 24-December 22, in Simao area, Yunnan province, China

【要旨】本稿では雲南生態環境史研究についての史料の種類・性質を紹介し、現在までの調査状況を説明する。さらに地方志の分析による統計データから16世紀～19世紀の雲南におけるマクロな社会変化を指摘し、今後の複数の史料の活用による展望を述べる。

はじめに

歴史研究において、人間の周囲をとりまく環境との関わりを含めて歴史的に考察しようとする生態環境史研究は比較的新しい分野に属し、とりわけ中国史研究ではまだ着手されたばかりである。なかでも今回対象としている雲南省南部については、班長の全体報告で指摘されている通り、①中国以外の東南アジア世界との連関②比較的緯度にあるにもかかわらず変化に富む地形により極めて興味深い生態環境におかれる地理的条件③当該地域が中国世界へ編入されていく過程において人間活動による大きな環境変動を経ている、という興味深い位置にあるものの、その研究は未だ本格的に着手されていない。

本報告では雲南南部の生態環境史研究を進めるに当たって、使用する史料とその性質、及びそれらの組み合わせによって示される視角の一端を提示することとした。

1. 雲南省元江以南地域の生態環境史研究の史料とその性質について

従来雲南のみならず中国地方史研究において重要視されてきたのは、各地で編纂された地方志—「地方行政単位を範囲にその地理や歴史を総合記録した書籍」であり、「史書であるとともに歴史的沿革に基づく地誌を論じてその地方の現状報告をも兼ねた」当代の記録—であった。地方志の基本的な構成は大まかに①地理沿革②軍事・行政関係の記録③人物関係記録、の3点から成る。但し地方志には同時に、各地方知識人コミュニティの中で編纂されたことからくる①編纂過程での記事の没個性化②前代記事の(非明示的な)引用③記述対象の限定④特に統計に顕著な形骸的要素といった問題点を内包しており、必ずしもその史料的価値を無条件に評価することはできない。[山本：1998年]

これまでの地方史研究では史料的制約により、公的な官撰の編纂史料である「実録・正史」と同等に地方志の記録もやむをえず公的な記録とみなして研究を続けてきたのが実情であった。80年代以降利用が始まった档案史料(行政文書)の直接利用も、雲南の場合中央からの地理的懸隔のためか現在も活発とはいえない。

しかしながら「元来自己完結的でよそからの関連情報による内容の深化が望めなかった」地方志の記述も一

次史料の発掘・照合により具体的な事実を見出す新たな役割が期待できるのである。ここでいう一次史料とは、石刻史料—石碑・墓誌—や民間の契約文書などである。ダニエルス・清水・立石の各個人別報告でも触れられているが、従来中国学術界では元代以降の石刻史料はその資料的価値を認められてこず、収集・保存はおろか研究上の利用は殆どなされてこなかった。

だが編纂された書籍が常に二次的な史料であるのに比し、石刻史料は歴史的事件の具体的様相を示す一次史料である。利用に際しては局地的な、ミクロの事象を語る史料である点に留意する必要があるが、他の文献資料の示すマクロな文脈と組み合わせることで新たな知見を提示し、史料双方が新たな意味を投げかけ、新たな史実を立証するものとなるのである。加えて生態環境史という新たな視点から考えることで、文集・筆記といった個人の著作にも新たな分析枠組を与えることとなる。

本研究班の作業は以上に述べるような複合的な史料の活用のみならず、研究の視点の転換により従来の史料・研究の局限性を越えようとするものでもある。

2. 碑文以外の史料収集整理の方針及び現況

2003年度においては他の報告でも述べるとおり実地調査により石碑の拓本採取を行ったほか、既に編纂されている文献史料のリストアップ及び収集につとめた。まず当該地域の社会変動を定量的に捉える目的から人口・耕地面積といった統計資料に着目し、当該地域の地方志を、統計データを含むものを優先して国内の関連図書館・大学などの研究機関を利用しデータを入手した。また現地・雲南でも雲南大学歴史系資料室及び雲南省図書館にて収蔵資料の所蔵確認作業を行った。調査結果は以下の通りである。

まず、雲南南部関連地方志に関して情報及び原資料の整理を行った。その結果、全省レベルで編纂された地方志は24件（うち国内閲覧可能なものは16件）、また府・県レベルで編纂されたものは100件（うち国内閲覧可能なもの29件）である。これらのうち数量データを記載したものを優先して収集することとした。現在までに全省レベルの地方志4件、府州県レベルの地方志12件を収集し、順次分析を開始している。国内閲覧ができないものについても現地で所蔵が確認できるものの利用や、また近年中国で活字での復刻或いは影印で出版される地方志も少なくないため、引き続き調査を続ける予定である。

また調査の際、雲南大学古籍線装資料室・雲南省図書館で所蔵調査を行い、現地での資料の収蔵状況を確認した。関連資料は地方志が計186件、その他関連資料が計200件あり、多数の国内では閲覧できない資料の所蔵が確認できた。今後順次入手・利用の方向をさぐっていく方針である。

同時に雲南大学歴史系資料室にて関連資料を調査、一部の資料を複写して入手した（計13件）。その中には現在では入手が困難である所蔵目録や資料目録、また碑文分析に資する研究報告が含まれ、今後の資料収集及び分析作業に益することが期待できる。

3. 現地碑文調査結果

2003年度に行った碑文調査結果は、便宜上分類して示すと以下の通りであった。

ここでは数量のみを示すが、個別碑文の内容と意義についてはダニエルス・立石・西川・増田による各報告を、また碑文資料の現況、及び拓本採取作業の実情については清水による報告を参照していただきたい。

类目	件数	类目	件数
建立碑	8	建立碑	2
献金・土地関連	23	献金・土地関連	14
墓碑	34	墓碑	6
その他(銘文不明残欠碑含む)	31	その他(銘文不明残欠碑含む)	16
総計	96	総計	38

表1 2003 碑文調査結果

4. 分析

今年度収集した資料はまだ分析途中であるが、現在までに確認された事実を提示したい。

明清代を通じ雲南省では省全体のレベル、及び州・県レベルを含め多くの地方志が発行されたことは、2 章で述べた通り、雲南南部関連に限定しても合計 124 件という出版件数からも理解できよう。

雲南省が中国王朝勢力によって具体的に版図に編入されることとなったのは明代初め、14 世紀に入ってからである。しかし当時の雲南省は王朝側と政治原理を異とする非漢族が多数を占めており、疫病など環境上の要因もあって直ちに直轄統治を布くことはできず、多くの地域で土着民族の首長を通じた間接統治、土司制度を通じた統治を行わざるを得なかった。

明末の雲南省全体の地方志である『滇志』の記述に従うと明末時点での中央の統治の様態は以下の通りとなる。



図 1 明代雲南統治形態模式図

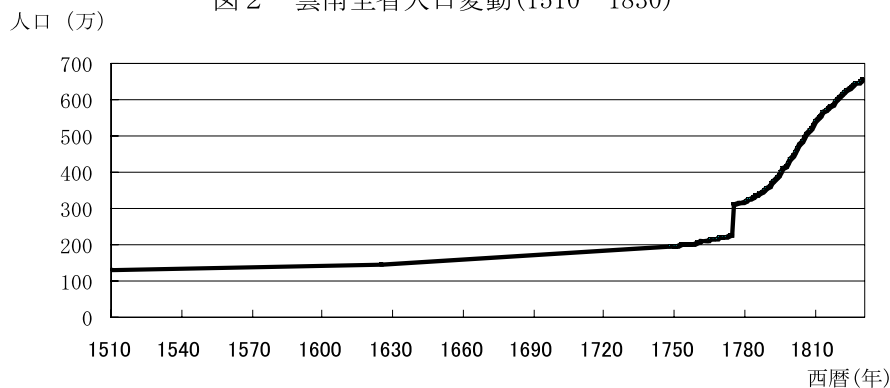
	戸	口	官民田地(畝)
雲南府	29550	128276	1074706
大理府	19501	241776	975661
臨安府	18359	274248	876419
永昌府	13062	87709	235669
楚雄府	10210	101131	547115
曲靖府	7872	43647	338523
澄江府	6002	28535	515820
蒙化府	4671	20709	258166
鶴慶府	6083	95364	302958
姚安府	5103	27797	210205
広西府	4636	82780	584902
尋甸府	1221	21424	246345
武定府	3145	28775	395156
景東府	2610	29687	12722
元江府	2559	48123	18383
麗江府	3302	50339	31784
広南府	440	7486	19155
順寧府	3052	15695	138818
雲州	1189	4642	46007
北勝州	4307	23830	161877
∴	∴	∴	∴
全省合計	151214	1468625	6990389

表 2 明代雲南人口・土地統計

(データは天啓『滇志』に拠る。図 1 は [譚 a: 1987] より作成)

表 1 は明代末期の地方志・天啓『滇志』に従い 17 世紀初頭の雲南省の人口・耕地面積の数字を表にしたものである。中央から官僚が派遣され、人口・土地面積がともに把握されている地域は王朝の直轄統治がなされていると見なしうるが、土着非漢族が首長に任命され(土司)、人口・耕地統計の無い地域は実質的には王朝の統治は及んでいないとみなせよう。地理的区分を図 1 に示す。これをみると、明代においては実質的な王朝の統治は元江以北が中心であり、かつ実質的な統治を示す人口・耕地面積データも限られたものであったことが理解できよう。元江を越えて雲南全域に中央王朝の統治が及んだのは清朝以降のことであり、それは全省を対象に編纂された地方志の人口統計からも伺うことができる。

図 2 雲南全省人口変動(1510-1830)



(データは正徳『雲南志』, 天啓『滇志』, 道光『雲南通志稿』による)

ここで 16～17 世紀を通じて微増傾向であった人口が、18 世紀半ばから急カーブを描いて上昇していくことがわかる。この数値の急上昇はひとつには当時の税制改革による統計範疇の変化によるものであるが、何よりもこの時代に爆発的に“王朝の管理下に把握できる人口”つまり漢人人口が増加したことを示している。従来の“圧倒的に非漢族人口が多数を占め、中央から移住してきた漢人は衛所という軍事拠点を中心にコロニー状に展開する”状況は、ここで大きく変化したのである。

なお、この地方志の編纂・刊行そのものが、ここで対象とする雲南南部地域の場合、地域変動を示すひとつの指標となることを指摘しておきたい。というのも地方志編纂は在地の知識人を総動員する一大事業であり、かつその地域の文化程度を称揚する運動が起るには一定以上の文化的蓄積、及び知識人コミュニティの存在を前提とするからである。

例えば元江以南のいくつかの地域において、地方志編纂事業の進行状況を見ると以下の通りとなる。

まず各地域の地理的位置を図示したのが図 3 である。さきに示した図 1 と比較するとわかるとおり、いずれも明代は土司の支配権力が優位にあった地域であり、地方志編纂を担う在地の漢人知識人を多数擁する社会の形成は、清代以降の入植に俟つところが大きかったといえよう。



図 3 清代雲南行政区画図([譚 b : 1987] より作成)

以上の地域での地方志編纂の進行状況を表 3 に示す。

				[康熙]新平縣志(四卷)	[康熙]蒙化府志(六卷首一卷)	[康熙]元江府志(二卷)	[康熙]順寧府志(三卷)	[康熙]石屏州志(十三卷旅途一卷志補一)	年代推移
			[雍正]景東府志(五卷首一卷)				[雍正]順寧府志(十卷首一卷)	[康熙]續修石屏州志(五卷)	
			[乾隆]景東直隸廳志(四卷)		[乾隆]續修蒙化直隸廳志(六卷)		[乾隆]順寧府志(十卷)	[乾隆]重修石屏州志(八卷)	
			[嘉慶]重修景東直隸廳志(二十八卷)					[乾隆]續修石屏州志(二卷)	
	[道光]普洱府志(二十卷)	[道光]威遠廳志(八卷)	[道光]景東直隸廳志(二十八卷)	[道光]新平縣志(八卷)		[道光]元江府志(四卷)	[光緒]續修順寧府志稿(三十八卷)		
	[光緒]普洱府志稿(五十一卷首一卷)				[宣統]蒙化鄉土志(二卷)				
[民國]墨江縣志稿	[民國]普思沿邊志略		[民國]景東縣志稿(二十二卷首一卷末附)	[民國]新平縣志(八卷)	[民國]蒙化志稿(二十六卷)	[民國]元江志稿(三十卷首一卷末一卷)		[民國]石屏縣志(四十卷首一卷)	
[民國]墨江縣志資料				[民國]續修新平縣志(八卷)		[民國]元江鄉土詞言	[民國]順寧縣志初稿(十四卷首一卷)		
				[民國]新平縣鄉土志(三卷)		[民國]元江屬志書草本			

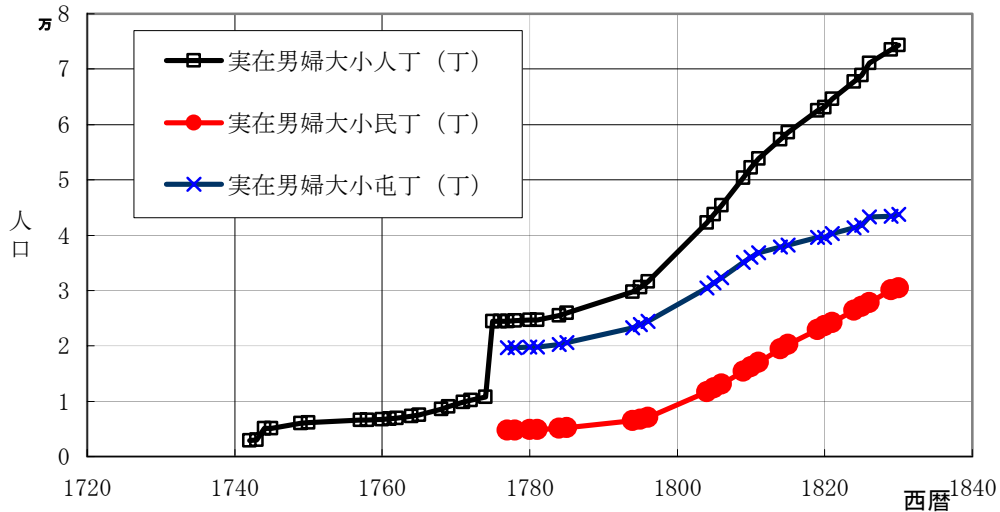
表 3 雲南南部地方志編纂表

以上から県により地方志編纂事業の進行には大きなひらきがあり、これは各地の漢人による現地の「開発」、漢文化コミュニティ形成の進展の相違を反映していると理解できよう。

さらに今回対象となる元江以南地域から、現在までに比較的データのまとまっている以下の地域につき人口変化の詳細を見ることとする。

景東直隸庁の場合：

図4 景東直隸庁人口推移

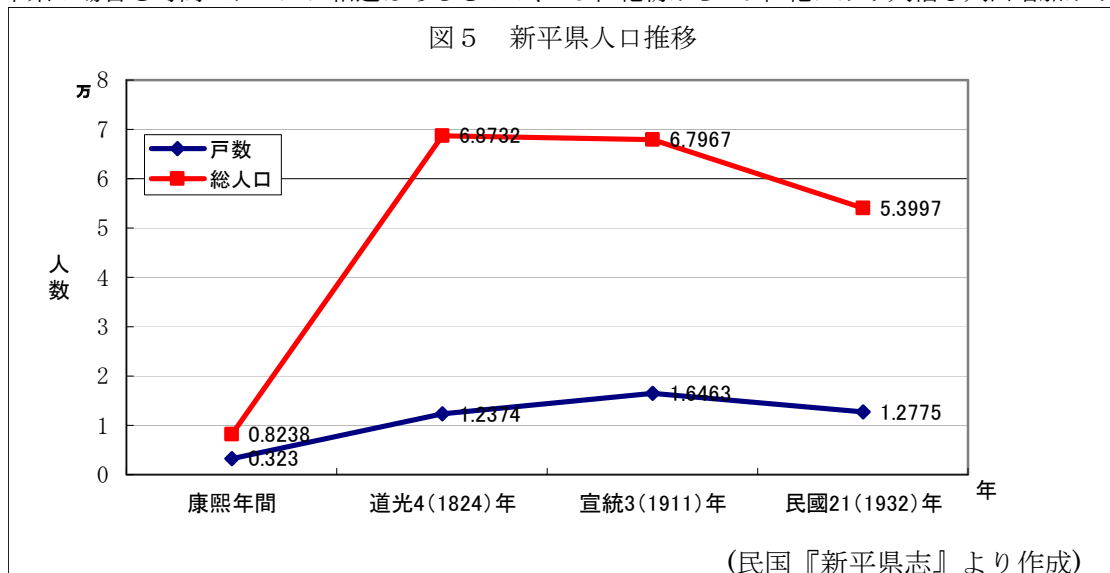


(道光『雲南通志稿』より作成)

景東直隸庁の場合は全省人口の推移とほぼ連動したかたちで、18世紀末より人口が急激に増加する様相が観察できる。

新平県の場合：

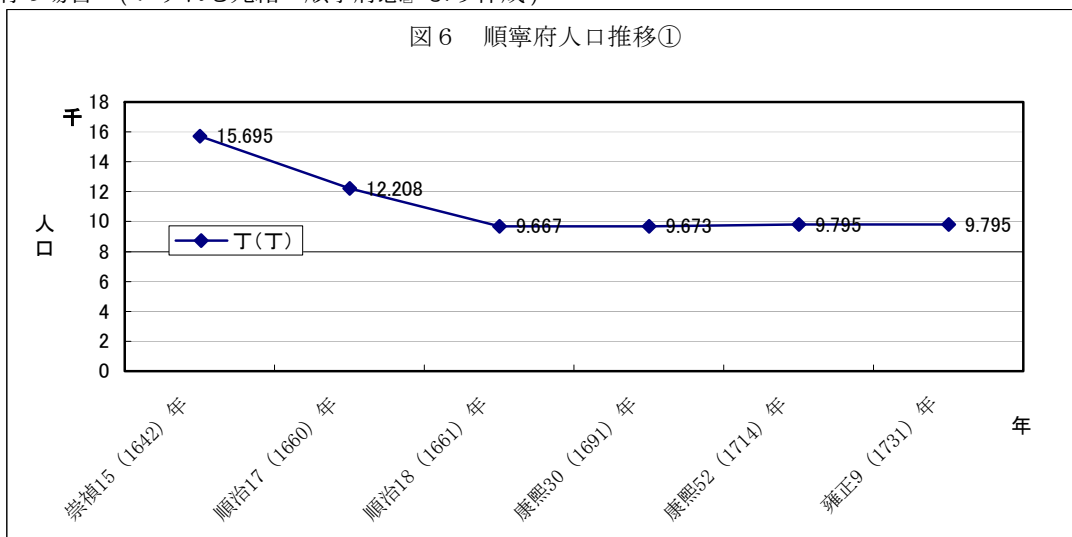
新平県の場合も時間スケールに相違はあるものの、18世紀初から19世紀にかけ大幅な人口増加がみられ、



(民国『新平県志』より作成)

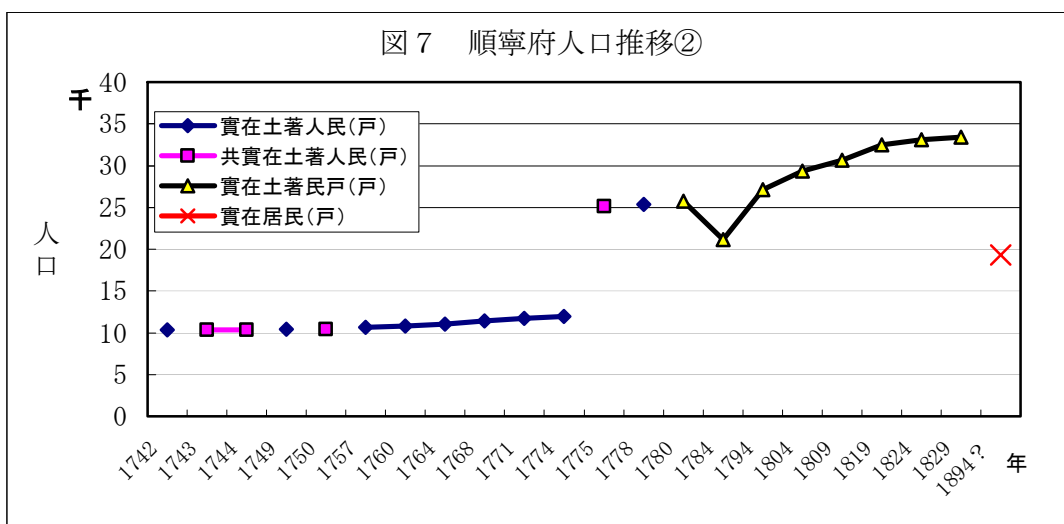
全省の変化と連動した人口変動が観察できる。

順寧府の場合：(いずれも光緒『順寧府志』より作成)

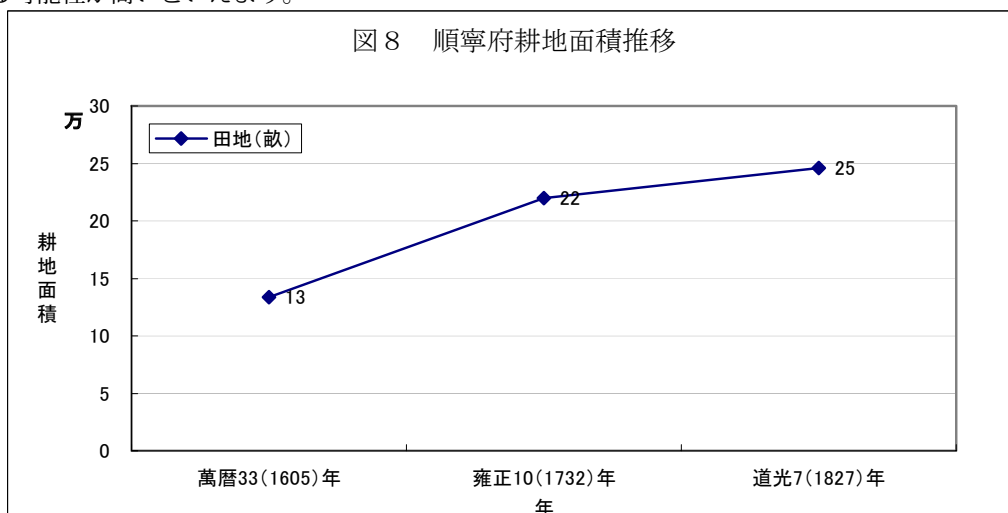


順寧府の場合、人口分類範疇の相違の都合上、2つに分割して示している。するとここでは明代末期より清初にかけ一時的に人口が減少し、以後しばらく横ばい状態が続いたことがわかる。これが上昇傾向に転ずるのはやはり 18 世紀後半であり、この時期大きな社会変化が生じたことが伺われる。

続いて耕地面積について検討すると、明代末期から清代にかけ約 60%の増加をみせ、19 世紀初頭には明代



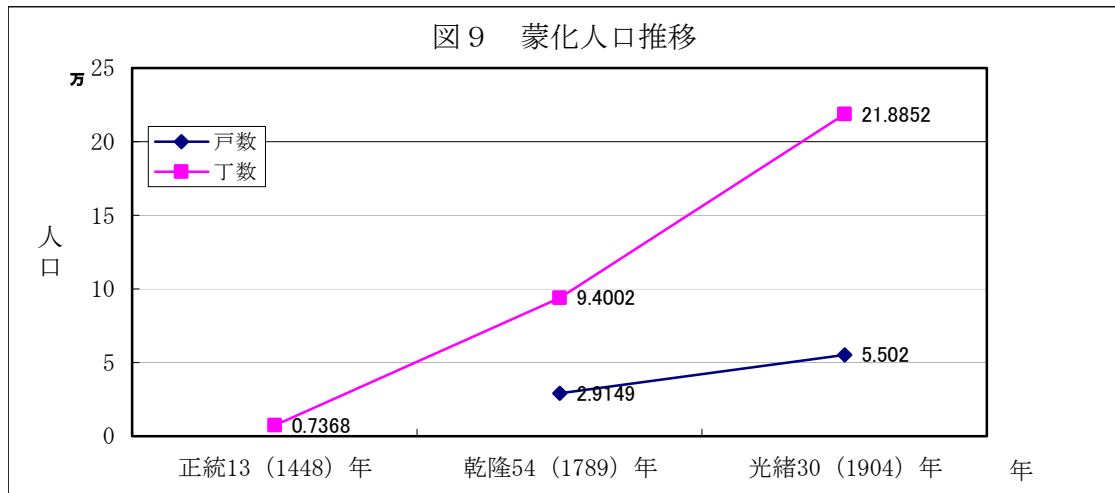
のほぼ倍の耕地面積に達している。西川報告で述べられているように、この時期の土着権力の解体過程が影響している可能性が高いといえよう。



しかしこれらの数値は常に数字合わせ的な曖昧さがあるためデータの使用には十分な検討が不可欠である。例えば耕地面積の記載には膨大な端数を含んでおり、人口のカテゴリーは一貫性に欠けている。しかもこれらの変動の要因について明示的には地方志から判断し難い。従来は地方志の記載に公文書や正史・実録などの編纂史料を組み合わせて実態を考察するものであったが、もうひとつこの数字に一定の具体像を与えうるのが今回調査を行った碑文史料なのである。

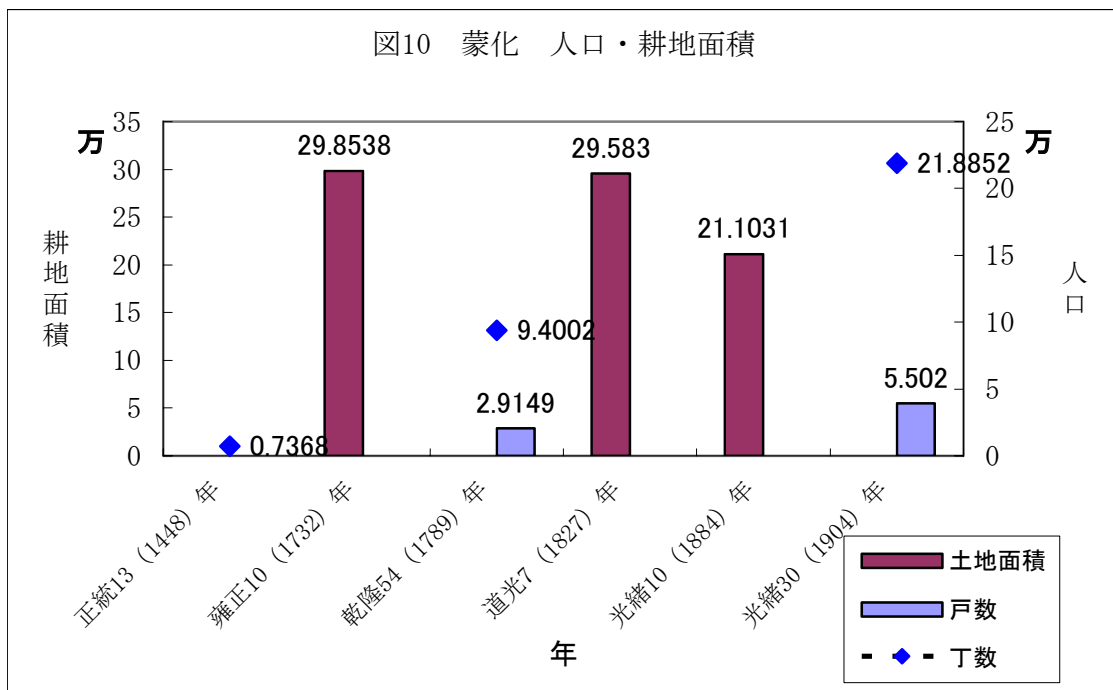
蒙化府(庁)の場合：

まとまった碑文史料の得られた巍山県(明代は蒙化府、清代は蒙化直隸庁)についてであるが、まず人口推移の傾向について図9に示す。(以下図9・10は民国『蒙化県志稿』により作成)



ここでは明代から時代変遷に伴い、右肩上がりの人口増加が確認できる。

さらに耕地面積の推移を図10に示す。

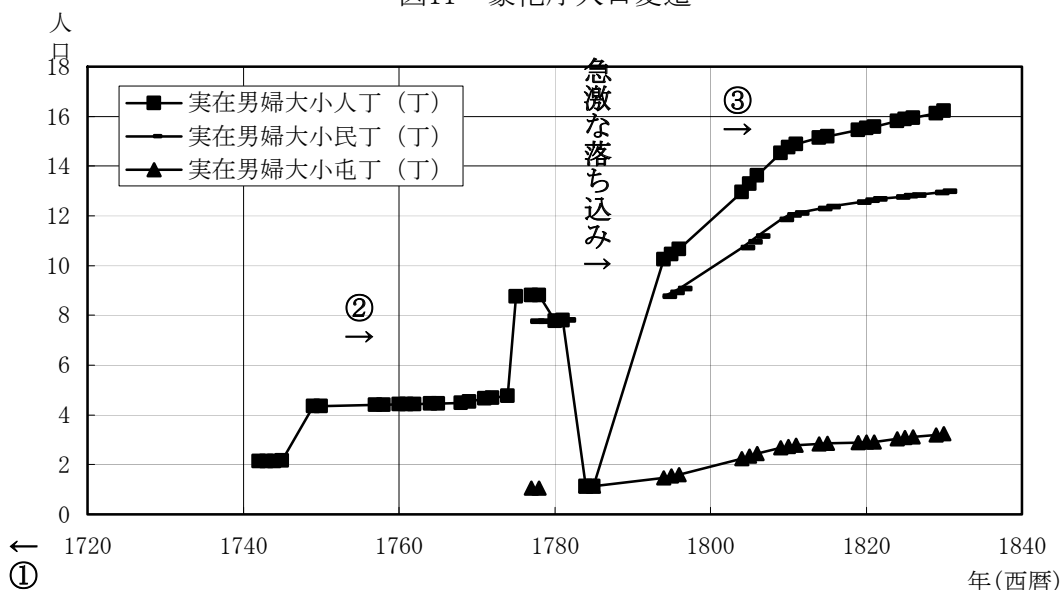


すると人口の右肩上がりの増加とは逆に、耕地面積は清初を境にむしろ減少傾向にあることが示される。耕地面積が減少する一方で増大し続ける人口をいかに支えたか、という課題はこの時期の当地の社会変化を考える際、新たな要素を考慮に入れる必要があることを示している。

ところで異なる情報源を利用するとまた異なった様相が明らかとなる。例えば蒙化の人口について、再度道

光『雲南通志稿』に従い人口の変遷を調べたものが図 11 であるが、民国『蒙化県志稿』では明らかでなかった事実が浮上してくる。

図11 蒙化庁人口変遷



ここでは 18 世紀末に人口が激減し、また短期間のうちに回復するという不自然な人口推移が見られる。現時点ではこの人口の急激な変化が何に起因するのかは明らかではないが、仔細な検討を通じこうした地域ごとの変化を把握しうることを指摘しておきたい。

さて今回巍山地区にて採取した拓本には、寺院への田地寄進や水利・土地関連の取り決めを記した碑文が少なからず含まれているが、これらの立碑年代を整理してみよう。

重建圓覺寺後院新置口住田碑記	巍山県圓覺寺	1622
圓覺寺南院新置常住福田記	巍山県圓覺寺	1644
新置圓覺禪寺後殿常住碑記	巍山県圓覺寺	1710
巍宝山青霞觀常住田碑記	巍宝山青霞觀	1714
巍宝朝陽洞徂極宮新置常住水暮碑記	巍宝山培鶴楼	1726
玄龍寺重建彌羅宮並置香田碑記	巍山県玄龍寺	1760
巍宝山玉皇閣常住田碑記	巍宝山玉皇閣	1810
松花会功德田碑記	巍宝山玉皇閣	1810

未だ整理中の部分が多くデータが充分ではないため、明確な傾向とは言い難いが、① 17 世紀前半② 18 世紀前半③ 19 世紀前半の時期に立碑されていると考えられる。図 11 の変遷を考慮するとこれらの時期は相対的な安定時期であり、かつ次の次代の人口増加に先立っていると言うことが可能と言える。つまり碑文の立碑はマクロな人口変動に関連した指標であり、またミクロの実態を示す史料と見なしうるであろう。碑文の内容の検討はまだ緒についたばかりであるが、これまで述べた地方志をはじめとするマクロ史料と碑文をはじめとするミクロ史料を組み合わせることで、今後よりこの地域の社会の実態を立体的に理解することが期待できるのである。

おわりに

以上本稿では主に地方志を中心とした文献史料の性格やこれまでの調査状況を述べるとともに、主として人口統計の分析を通し巨視的に雲南南部地域の社会変動について検討してきた。本稿では紙幅の関係上生態環境史と文献史料・碑文史料の複合的な活用の詳細については述べられなかったが、本稿と他の碑文を中心に扱った個別報告とを対照していただければ研究における今後の展望や筆者の意図するところは理解していただけよう。

人間と環境の関わりを歴史的に考察するには、位相の異なる多様な史料の総合的な活用が不可欠なのである。

【文献】

- 金思輝 (主編) 1996 『中国地方志総目提要 (下冊)』 漢美図書有限公司
- 譚其驤 (主編)a 1982 『中国歴史地図集 第七冊 元・明時期』 地図出版社
- 譚其驤 (主編)b 1987 『中国歴史地図集 第八冊 清時期』 地図出版社
- 山本英史 1998 「中国の地方志と民衆史」
『中国民衆史への視座：神奈川大学中国語学科創設十周年記念論集』 神奈川大学中国語
学科編，東方書店，P3～25

【Synopsis】 This paper introduces the types and nature of sources for the study of the environmental history of South Yunnan, and explains the present situation of investigation. Furthermore, it points out macro-social change in 16th-19th Yunnan through an analysis of local gazetteers, and emphasizes the importance of utilizing plural sources.